



プロジェクト終了後も、現地の技術者たちが中心となり養殖が続けられた



1989年に帰国したサクラマス



1973年、初めてサクラマス(サケ科)を放流

1989	1986	1985	1983	1982	1981	1979	1976	1974	1973	1972	1970	1969
チリ南部の2州で日本政府の支援の下、大日本水産会が第一次調査を実施(第二次調査は71年)。	チリ漁業局のバプロ・アギレラさんが北海道で研修。	長澤専門家、白石専門家派遣。サクラマス(サケ科)の卵が日本から到着。	サクラマスの稚魚を初放流するも、一匹も遡上せず(放流はその後も継続)。	シロサケの放流開始。	白石博士ふ化場完成。	エンセナーダ・バハ湾内にいけすを設置。	支援対象にカラフトマス(サケ科)を導入。	海面養殖のシロサケから初採卵。	支援対象にチリ国産卵(ニチロが生産)のギンザケを導入。	飼料試験工場の運転開始。	ウルティマ・エスベランサ湾(最後の希望)の河川に、シロサケ7匹が遡上。	サクラマスが大量回帰。ギンザケの国産卵生産を本格的に開始。 JICAの協力終了。

活動が始まって10年余り。日本企業ニチロの海面養殖産業への参入、チリ財団による大規模事業化なども進み、チリのサケ」に対する関係者の期待は日に日に高まっていった。

養殖産業を発展に導いたチリ人技術者たち

そして86年のある日、待ちに待った瞬間が訪れた。コジャイケから南へ2200キロ、ウルティマ・エスベランサ湾の河川に7匹のシロサケが遡上したのだ。その湾の名は、日本語で「最後の希望」。89年にはサクラマスもヘネラルカレラ湖に大量回帰した。白石さんの「命が生き返った」とも思った。

86年から3年間、JICA専門家として派遣されていた酒井光夫さん(独立行政法人水産総合研究センター遠洋水産研究所)は、「当時はチリ人の技術者とがむしやりに働きました。周りに何もなかったのもありますけど(笑)」と当時を振り返る。日本国内にはプロジェクトの支援委員会も設置され、「水産庁水産研究



日本のスーパーに並んでいるサケ。よく見てみると「チリ産」だ

1500キロにある「陸の孤島」に、JICA 専門家が赴任したのは72年のこと。長年、サケふ化事業を手がけてきた長澤有晃さん、淡水魚資源研究の第一人者である白石芳一さんだ。しかし、やっと活動の基盤が固まった時に、白石さんが脳内出血で急逝してしまう。

皮肉にも、北海道から届いた第一号のサケ科のサクラマスの卵を輸送したのは、まだ息が残る白石さんを首都まで運んだセスナ機。そのすべての役割を担った長澤さんいわく、まさに「失われる命があれば、生まれる命がある」だった。そして73年、ふ化に成功した稚魚を初めて川に放流。しかし待てど暮らせども、解決策に頭を悩ませる日々が続いた。そこで、海面のいけすである程度の大きさまで育ててから放流することに。この方法なら、稚魚の時に他の魚に食べられるリスクは低くなる。それが期待されたからだ。さらに、日本から輸入していたサケの卵も現地で一から育てることになった。親が育てば子も育つ。そんな考えからだった。

所の第一線の研究者から、放流、飼育、餌料、魚病などに関する技術的かつ政策的なアドバイスが受けられたことは大きかった」と酒井さんは強調する。

87年以降は、協力の主眼をサケの移植から「養殖」へと転換。魚病・防疫体制の確立、高品質な配合飼料の開発など、養殖に必要な技術の移転が行われた。現地の民間企業の参入も次々と進み、89年には、日本が最大の輸出先となっていた。

日本の協力が終わった後も、サケ養殖への挑戦は続いた。その役割を担ったのは、JICA専門家とともにプロジェクトに取り組んできたチリの人たちだ。「彼らは「学ぶ」ということに対してとてもハンダリでした。自らの技術を生かしてそれぞれに活躍の場を見つけ、サケ養殖産業の発展に貢献しています」と酒井さん。70年に北海道中標津にJICAの研修で訪れて以来、サケ養殖に人生をささげてきた、バプロ・アギレラさんもその一人だ。

初代専門家の白石さんが亡くなってから来年で40年。まさにゼロからのスタートだった当時からは想像もつかないほど、チリのサケ養殖は一大産業へと発展した。「プロジェクトメンバーで再びコジャイケを訪れ、放流されたサケが戻ってくる姿をもう一度見たいと話しているんです」と酒井さん。20代の若手だった彼は今もなお、水産業界の第一線の研究者として活躍している。

現地の人々の力で継続され、着実に実ったチリのサケ養殖産業の成果。それはまさに、日本とチリの強い「つながり」になっている。

日本とチリ40年前の出会い

白いごはんにお味噌汁、おかずには焼きサケ。こんな「純和食」の朝食に、ほっとする日本人は少なくないはずだ。北海道や三陸沖などが産地として有名なサケだが、実際はその半数近くを輸入に頼っている。

スーパーに並ぶ切り身サケを見ると、「チリ産(養殖)」の表示が目につく。日本人が消費するサケは年間約55万トン。うち約3割が、南米チリから運ばれてきている。世界でも一、二位を争うサケ輸出大国チリ。しかし驚くべきことに、かつてこの国にサケは「一匹もいかなかった。豊富な淡水、水深のあるフィヨルドなど、生息地としては適していた。しかし20世紀初頭から幾度となく試された移植はすべて失敗に。当時、地方部を中心に貧困層の多かったこの国。1969年、新たな産業を開拓すべく、南部2州でサケの移植を念頭においた調査が日本の協力により始まった。

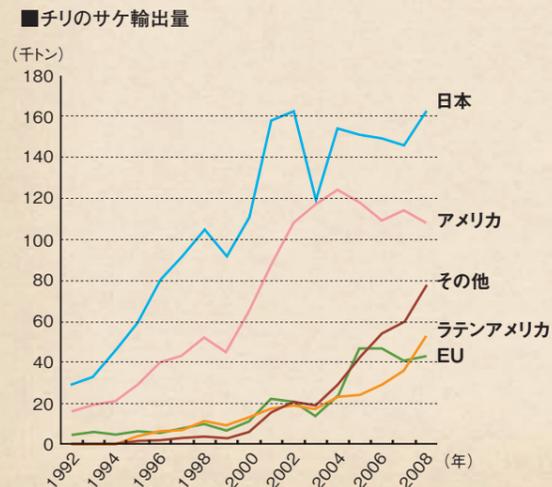
最終的にプロジェクトの拠点となったのは、南部の町コジャイケ。首都サンティアゴから

サケ輸出大国の軌跡

日本人の食卓の定番といえ、鮮やかなオレンジ色のサケ。日々の生活の中で、誰もが当たり前のように食べているが、実はその生産の陰には、さまざまな人の汗と涙の物語がある。

今から40年前、南米のチリをサケの輸出大国にすべく現地に渡り、奮闘を続けたJICA専門家たちがいた。

参考：細野昭雄著「南米チリをサケ輸出大国に変えた日本人たち」ダイヤモンド社



コジャイケの白石博士ふ化場。現地で亡くなった白石さんの功績を冠して命名された。今もなお、両国のつながりを示す看板が設置されている



History
次世代への財産